近江の懸仏（下）

滋賀県立安土城考古博物館
主任　山下　　立

(3) 多彩なバリエーション

前号では、典型的な形式を備えた懸仏、すなわち円形鏡板に像容の本尊を現わす銅造遺品について、その技法、様式的変遷を紹介しました。本号では、こうした一般的なタイプとは異なる諸作品を取り上げ、懸仏の多様性を窺うことにしましょう。

イ．材質（木造、土造）

まず、材質についてみると、県内では銅造以外に木造と土造の作例が知られています。木造遺品は、懸仏としては全国的にも銅製遺品に次ぐ数が確認されますが、これを技法的に分類するならば、板絵や線刻などの平面的なものと、立体的に彫刻したものとの二系統に大別することができます。徳治２年(1307)の銘を持つ春日神社板絵懸仏（№⑨、径17.0㎝）は、県下では数少ない前者の例です。表面の彩色が殆ど剝落してしまい、尊容が不明瞭なのが惜しまれますが、紀年在銘の板絵懸仏としては全国で二番目に古い貴重な一面となっています。また、先頃発見された百済寺の板地墨書懸仏も、材質的にはこのタイプに分類できますが、尊像の代わりに梵字を本尊とする作品でもあるので、次節で改めて取り上げることにしましょう。

一方、木造遺品のうち、立体的なものは県内で二十点以上が確認されています。ここでは、その中でも最も大型の浄福寺十一面観音像懸仏（№⑩、径60.7㎝）を代表例として紹介します。本尊は丸彫で、両肩先、両前膊、膝前部を矧ぐなど、一般的な仏像と同じ制作技法によって造られています。仏師による造像とみて差し支えないでしょう。また、本面の鏡板厚は約12㎝もありますが、内部を空洞とするため予想以上に軽量で、懸垂に適し

⑨ 板絵尊名不詳像懸仏
鎌倉時代　東近江市　春日神社

⑩ 木造十一面観音像懸仏
江戸時代　甲賀市　浄福寺

た仕様となっています。

土造懸仏の例としては、元和６年（1620）銘の高島市個人蔵懸仏（№⑪、径23.4cm）が挙げられます。本面は、笑みを浮かべた一面八臂坐像を浮彫したもので、総体に民芸的な味わいがあります。なお、技法的にみて土造懸仏とは、塼仏（せんぶつ）の様に焼成せず、塑造と同じく成形後に乾燥させたものを指して言います。本面は現存唯一の事例でしょう。

ロ．本尊（種子、宝塔）

次に、本尊の特殊例に目を転じてみましょう。像容以外のものでは、仏菩薩を象徴する梵字（古代インド文字）を本尊とする種子（しゅじ）懸仏が代表的な存在です。県内では、最近までこの種の作例が確認されませんでしたが、昨平成16年、百済寺から六面もの種子懸仏が発見され、安土城考古博物館で筆者が担当した秋季特別展において初公開させて頂きました。いずれも、木製素地の鏡板に種子を墨書したもので、そのうち、地蔵種子の一面（№⑫、径37.9cm）には、天正３年（1575）の紀年とともに「今度国主寺家没落諸堂諸社一宇不残焼失畢」との文言が記されています。この銘文は、天正元年４月の織田信長による百済寺焼討の惨状をよく伝えるもので、板地墨書という本面の簡素な形式も、焼討直後の当寺の経済的な苦境を物語っているようです。

なお、現在は県外へ流出してしまいましたが、神奈川・総持寺の弘長２年（1262）銘銅造不動種子懸仏（径39.8cm）は、銘記によって、大津市葛川（かつらがわ）の明王院に奉懸されていたことが知られるすぐれた作品です。現存する紀年在銘種子懸仏の中でも、二番目の古例として注目に値します。また、大津市歴史博物館の絹本著色山王垂迹曼荼羅図（№⑬、縦79.0cm、横48.7cm）には、山王諸神のほか、画面上部に三面の種子懸仏が描かれています。各面の梵字は、中央が山王上七社、左右が下、中七社の本地仏に当り、全体で山王二十一社となります。本例はあくまで絵画作品ですが、中世におけるこの種の懸仏の流行を示唆するものと言えるでしょう。

特殊な本尊として、宝塔を据える例が葛川明王院に二面現存しています。そのうち、文安４年（1447）銘の一面（№⑭、径190.0cm）は県内屈指の大型遺品で、室町時代特有の装飾過剰な鏡板中央に金銅製宝塔を装着したものです。内部に銅板打出製不動明王立像が納置されているので、厳密に言えばこの像が本尊に当りますが、他に類例のない特異な作品であることに相違ないでしょう。因みに掲載

⑪ 土造尊名不詳像懸仏
江戸時代　高島市　個人

⑫ 板地墨書地蔵菩薩種子懸仏
桃山時代　東近江市　百済寺

⑬ 絹本著色山王垂迹曼荼羅図
南北朝時代　大津市歴史博物館

⑭ 銅造宝塔懸仏（部分）
室町時代　大津市　明王院

この制作時期は数ある扇面形懸仏の中でも最も古い部類に入るものとして見逃せません。

ところで、扇とは単なる実用品にとどまらず、神の依代となり、御神体として奉祀されるとともに、伝統的に月に譬えられる存在でした。それは、御神体の鏡であると同時に、月輪をも意味する懸仏の円形鏡板のあり方と規を一にするもの、と言ってよいでしょう。こうした特異な形式が成立する所以です。

写真は、宝塔を鏡板から取り外し、塔身の三ヶ所の扉を開放して、内部の不動像が見える状態で撮影したものです。ところで、前号に記したように、室町時代は懸仏の普及に伴って量産化が進み、既製の小型遺品が氾濫した時代でしたが、他方で本面の如き大型の注文品にも一定の需要があったのです。その場合は、多数の人々の合力による造立が一般的ですが、本面もまた、願主など十人の名と各々の拠出金額が裏面に銘記されていて、こうした大型遺品奉懸の実態が窺えます。

ハ. 鏡板の形状（扇面形）

円形以外の鏡板の例として、代表的なものは扇面形でしょう。これまでに紹介した木製懸仏や種子懸仏に比べると、その数は僅かですが、それでも全国で三十面近く、県内でも四面の作品を確認することができます。大安養神社懸仏（No.⑮、最大径19.2cm）はその一例で、七本骨を添えた扇面部中央に、鋳銅製鍍金の馬頭観音坐像を貼装した作品です。鎌倉末乃至南北朝時代の制作と考えられますが、

(4) 歴史資料としての懸仏

明治初年に吹き荒れた廃仏毀釈は、数多の懸仏を闇に葬り去りましたが、名立たる大社に伝わる一級の作品ほど人目につき易く、廃棄の憂目に逢ってしまったと言えるでしょう。そのため、現存作品の中で名品といえるものは少なく、寧ろ、美術工芸品と呼ぶのが憚られるような粗末なものの方が多い程です。しかし、これらも先人たちの信仰や生活を物語

⑮ 銅造馬頭観音像扇面形懸仏
南北朝時代　びわ町　大安養神社

⑯ 横山神社懸仏群（裏面）
室山時代　木之本町　横山神社

長による比叡山焼討で灰燼に帰し、その後復興はされたものの、廃仏毀釈によって、仏教色のある文化財の大半が焼却されてしまいました。ところが、昭和16年の東本宮の修理に際して、その下殿から十二面の懸仏が発見されたのです。そのうちの一面がNo.⑰（径18.1cm）で、天正10年（1582）12月に二宮御正体として社務行丸、行広が奉納したとの旨が記されています（現状では一部不鮮明）。社務行丸とは、焼討によって烏有に帰した日吉大社の復興に尽くした祝部（はふりべ）行丸のことで、行広はその子息です。『天正本山再興記』によれば、天正10年12月27日に七社の仮殿の造営がなったといいます。この晴れの日に、日吉社再興の中心人物である行丸と行広によって奉懸された懸仏が本面だったのです。

る貴重な文化財なのです。また、美術史的には無視されがちな粗略な遺品であっても、銘文の記されたものは意外に多く、文献では得られない情報や、それらを補強する内容を持つものも含まれています。最後に、歴史史料として興味深いそうした二つの事例を取り上げ、本稿を閉じることにしましょう。

一つは、横山神社の事例です。当社に伝わる十二面の在銘懸仏（No.⑯）のうち九面には、延徳４年（1492）から享禄３年（1530）にかけての紀年銘が見られますが、これらの奉納年は全て異なっているのに、日付はいずれも正月三日となっているのです。しかも、これらの多くに、当地の年頭行事オコナイの当番役員である頭人の肩書きを持つ人名が記されており、かつてはオコナイの一環として正月三日に懸仏が奉懸されていたことが窺えます。この行事は、現在も湖北一帯で執行されていますが、懸仏奉納の習慣は既に絶えてなく、このように過去のものとなった民俗行事の実態が、懸仏の銘文から浮かび上がってきたわけです。

いま一つは、日吉大社の事例です。周知の様に同社は、元亀２年（1571）の織田信

⑰ 懸仏鏡板（裏面）
桃山時代　大津市　日吉大社

滋賀文化財教室シリーズ　No.213号
発行年月日　2005年３月６日
編集・発行　財団法人 滋賀県文化財保護協会
〒520-2122 大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL(077)548-9780 FAX(077)543-1525